

川口隆行著 『^{ヒロシマ}広島 抗いの詩学——原爆文学と戦後文化運動——』

佐藤 泉

後年のための覚書として『^{ヒロシマ}広島 抗いの詩学——原爆文学と戦後文化運動——』（琥珀書房、二〇二二年二月二八日発行）が歴史のどの地点で刊行されたのかを書いておこう。未来から振り返られたときに、この年こそが引き返し不可能の変化が起きた年とされるのではないかと予感があるからだ。二〇二二年二月二四日、ロシアによるウクライナ軍事進攻が始まった。侵攻開始にあたって、プーチン大統領はロシアが有力な核保有国であることを強調し、侵攻後の一時期はロシアがチエルノブイリ原発を制圧するという局面もあって世界が一瞬凍り付いた。核の威嚇によって国際社会の介入を遮断しつつ通常兵器で侵攻を進めるという「抑止」の使用法があり得てしまったのである。この事態をもって核兵器の保持が戦争を防止するという核抑止論は破綻したというべきだ。六月には核兵器禁止条約第一回締約国会議が行われ、採択されたウイーン宣言は「核抑止論の誤り」を明確にしている。だがその後、日本に拡がった光景は奇怪なものだった。

砲撃を受けて崩壊したマンシヨン、地下室で怯える住民の映像

がインターネットやテレビで流れ、略奪、性的暴行、夫と別れて国外に避難する母子の姿が伝えられた。今回のウクライナ報道はこれまで以上にその情報量が格段に増してきている。戦場となった場で何が起きているのかが広く知られる必要があるという点で、それは歓迎すべきことである。私たちは戦争の恐ろしさをあらためて理解し、あつてはならないことだという確信を強くした。戦争は恐ろしく、あつてはならない。その通りなのだ。だがその後が続いたのは、だから抑止力を、という流れだった。侵攻直後の世論調査では、日本と周辺国との間で戦争が起ころかもしれない不安を以前より感じるようになったかという質問に対して八割がイエスと答え、またこれに連動して軍事費増額を容認する調査結果があいついだ。政府与党を中心に日本も中国を念頭においていた軍事力強化が必要だとする声が高まり、「敵基地攻撃能力」「核共有」という言葉が飛び交うようになった。抑止が破綻したときに抑止力の強化が喧伝され、それもロシアではなく中国に対する抑止力が求められたのである。前後の経緯はここでは省くが、

臨時国会が閉会するタイミングを見計らったかのように一二月六日、政府は「国家安全保障戦略」など安保三文書を閣議決定した。敵の弾道ミサイル攻撃に対処するための「反撃能力」の保有が明記され、日本の安全保障政策を大きく転換させる内容である。引き続き軍事費増のための増税ないし国債発行の是非が議論されたが、財源論の影で軍事力強化の是非を議論する声はかき消されていった。「戦後日本」を覆す内容も、閣議決定というその手続きも、万事が異様だった。

ただ、年があけると世論の動向にも変化が現れ、軍事力強化そのものに反対する声が世論調査の結果でも多数となりつつあることを言い添えておかなければならない。軍事費のGDP比2%以上の増額が物価高騰に苦しむ人々の生活にどれだけダメージを与えるかというリアリティが増したため、またその2%という数字自体がウクライナ危機以前からのアメリカ側からの要求であつて、まずは数字合わせが先行していた事情も分かってきたためである。要するに、ウクライナ危機によって引き起こされた私たちの恐怖と不安は政治的な操作対象となつていたので。私たちはウクライナの人々の悲劇を前にしてかきたてられた自分たちの情動を軍事化の資源として操作されたくはない。

もうひとつ二〇二二年が歴史のどのような地点だったかについては、「復興五輪」の翌年だということを書書の第Ⅱ部復興批判論に関連して記しておきたい。「復興」の言説は人々の抗いや希望をすり替えていくが、人びとの夢が盗まれていく経緯を刻んだ作品に本書は重点を置いているからだ。私たちは自分たちの希望を盗まれ、裏切られ、自分たちの姿を書き換えられる。それば

りか現在進行形で恐怖と不安を操作され、政治資源化されている。こうした「復興」の問題構成に対してなされる「抗い」は文学の仕事であり、そして文学研究の仕事である。それは取り逃がした夢を復元し、取り返すものであつてほしい。その意味からも本書はこうした歴史の今に対する介入となつていたことを記しておきたい。

本書は川口氏の前著『原爆文学という問題領域』(二〇〇八・二〇一一)以来の体験の個別性・協約不可能性(石原吉郎)／体験の普遍化・共有化(栗原貞子)の矛盾という問題意識の発展となつており、また「被害と加害が流動する記憶の場」「書く行為それ自体によつて、被害と加害という自明化された分節のありようが揺るがされ、問い直される」(二一四頁)過程がたどられている。特色としては、原爆文学を朝鮮戦争・東アジア冷戦の文脈において読む点、そして戦後文化運動における政治と文化の問題の掘り下げ、「戦後の主体」概念の刷新へと考察が深められている点にあるだろうか。と、ともに私としては本書に底流する「文学」そのものへの問いに動かされるところが大きかった。

第一章に『原爆詩集』が有名なのは、優れた詩的達成のおかげというよりは、特別な社会的問題と出来事に対する注意を喚起した点にある(一三二頁)というジョン・W・トリートの引用がある。ここに見られる詩的達成／社会的効用という対比は、原爆文学、あるいは文学一般についてまわる対立といえるかもしれない。つまり一方には自動詞の文学(書くこと自体をテーマとして追求)があり、他方には他動詞の文学(〜のことを書く文学、ノンフ

イクシオン等)があるということだ。これにまつわる議論、理論の長い歴史についてはおろが、原爆文学とは、自動詞の文学としても、また他動詞の文学としても「限界」に触れる文学であり、なによりそこに特異性があるということを終始感じながら私は本書を読んだ。たとえばカラストロフを表象する言語について次のような言及がある。「なおそれでも、日常の崩壊について何がしかの言葉が発しようとするならば、その営為のうちに言葉の徹底的な不自由さという根源的な受動性を感じざるをえないだろう。言葉を奪われ、言葉それ自体の不自由さにさらされる存在論的危機は既存の主体と言葉とに張り巡らされた約束事の崩壊でもある。」(第八章、二二頁)

本書がたどるのは、こうした言語の限界のみではない、第三章では明示的に人間の限界、人間と動物という主題系が扱われているが、この章だけでなく第五章で『デンダレ』第九号に掲載された金時鐘の「たしかに　そういう　目がある」もこれに教え入れることができる。殺虫剤をまいた「私」が「おもしろいまでに死んでゆく」蚊を「小人の国の　ガリバのように」眺めるのだが、さらにそれを背後から見つめている「もひとつの目」を背中に感じる、という詩である。化学兵器は農薬・殺虫剤の開発がもたらくなっていくと言われる。また霧社事件やベトナム戦争などの例のように、多くはアジアの戦場でそれが使われた(西欧での使用は躊躇された)とも言われる。虫のように殺してよいのは誰なのか、人間の境界がどのあたりに引かれるのかを嫌でも考えさせる。第二章の島陽二の来るべき原爆詩、第九章の第二次原爆文学、原子力と藝術をめぐる議論なども、通常の「文学」に向かうなら特に

この目で見なくてもよかつたはずの限界線を感じる箇所かと思う。人間の限界と文学の限界が交差する地点にあつて、文学理論は文学主義ならざるひとつの思想となるのだが、そうした批評になり得たものとして大田洋子『夕風の街と人と』をとりあげた終章に注目したい。大田の作品には「失人間」といった戦慄を禁じ得ない言葉が使われている。それはスベテアッタコトカ　アリエタコトナノカという原爆投下当時に露呈した表象の限界とはまた別の、「復興」における人間の限界を指し示している。「篤子は漸く気づきはじめていた。みんな壊れている。一人のこらげ壊れているのだ。人間の権利をうしない、生活をうしない、そして肉体をも魂をもうしなつた「失人間」ともいうべきものだ。篤子は思った。「失人間」はどんな階層でもなかつた。貧富の差も、職業の差も区別もない。人間としての完全な機能を失つた者たちが、「失人間」としての新しい階層となつて、こんにちうごめいているのだつた。／残暑のなかで、夕風はじつと風をとめていた。篤子は次にもまた、欠落したような幾人かの人々に出会わなくてはならなかつた。」

こうした人間のリミットは、本作品では次のように文学のリミットとともに可視化されており、そこに原爆文学の恐ろしい力が垣間見える。「この街の様相をひと皮めくれば、従来の文学のなし得る限界を超えた実態がそこにあつた。篤子は「小説」を書き得る能力を自分がうしなつていくことを知りぬいていた。」

そればかりかこの作品からは、人間の、あるいは文学の限界に突き当たりつつなお為される文学は必然的にその彼方を書き込むことにもなるということを教えられる。原爆がもたらしたものは

次のように従来の「範例」を超えてしまっており、したがって法は法の彼方を指向することになる。「原子爆弾の加害影響力というものは、従来の判例学説の外にあるものでしょう。われわれはこの事実にもとづいて法律上の考案をしなくてはならない。」

以上、具体的な細部を論じる以前の、本書を通して浮かび上がるさまざまなリミットについて書いたが、本書において重要なのはやはり原爆文学を朝鮮戦争・東アジア冷戦の文脈に置き直した点、そして戦後文化運動に関わる研究を前に進めた点にある。非体験者が表現者になることや集団的表現の位相についてなど、冒頭の章からすでに多くの発見があり、またなぜなのか忘れがたく印象に残る作品も少なくない。「古い家」に拘束されてきた女性が占領体制という別の軸と交差点でどのような言葉を選んだか、また、「弔慰金」の「三万円に／つながらる／夢が／こぼれて／みんな大事なことを忘れてしまった」ことを書き付けた詩など、比較的簡素なことばからこぼれたような無念や悔いが爪痕のように刻まれている。「かんぢんな事」の忘却を促し、前向きな心性を創出すること——「復興」がまず第一にはそのように人々の情動を政治的に操作する営為であったとしても、それに抗う言葉を拾い出す文学研究からはやはり押し流されてしまうことのないおびただしい問題意識を見出すことができる。ふたたび、みたびと繰り返し読み返さなければならぬ一冊だと改めて感じた。